

A-66 大豆から誘導される生理活性ペプチドについて
大妻女大家政 ○長野宏子

目的 大豆に存在する生理活性物質については、サポニン、フェノールなどの非タンパク性化合物、トリプシンインヒビターをはじめとして、ヘマグルチニン、ゴイトロゲンなどのタンパク性化合物について多数認められるが、アミノ酸、ペプチドの親兵より生理活性を検索した例は少い。本報告においては、大豆に存在する、または大豆から誘導される生理活性ペプチド様化合物について検索し、若干の知見を得た。

方法 (1)大豆種子を① α -ヘキサニ可溶性画分、②メタノール可溶性画分 ③水溶性画分に分け、④については更に透析を行い、その外液を用いた。また大豆種子をβ-インドール酢酸、2,4-ジクロルフェノキシ酢酸の各 10^2 モル溶液に5日間(20°C)浸漬して、浸漬液と発芽大豆種子に分け、後者は各可溶性画分として試験に供した。(2)各試料について総アミノ酸量を加水分解前後に分けて定量するとともに、アミノ酸自動分析計、Sephadexによる分離定量を行った。(3)生理活性の検索は、*E. coli*等を用いて濁度により行った。

結果 (1)各可溶性画分についてアミノ酸量を定量したところ加水分解するににより、さらに糖量に増加するのが認められた。(2)アミノ酸自動分析、Sephadex G-10等による分析の結果、Glu, Asp. を含むペプチドと考えられる成分を分離した。(3)各試料を用いて細菌性を検索したところ、各試料とも増殖効果が認められた。